人口の高齢化を中心とした我が国の人口動向とその問題について，広く国民の理解と認識が高まり，あわせて世界の人口問題について国民の関心が高まることを期待する．

（以下は章節の見出しである）

総　　論

第1節　日本人口の現状と問題点

第2節　日本の人口問題に対する対応の方向と提言

第3節　国際人口会議に対する日本の立場と役割

第1章　静止人口と高齢化の進展――日本人口の回顧と展望――

第1節　静止人口に向けて

第2節　高齢化社会の到来

第3節　人口高齢化の社会経済的影響

第2章　なぜ最近出生率が下がったのか

第1節　最近の出生率低下

第2節　結婚時期が遅くなった

第3節　「2人っ子」の線は崩れているか

第4節　定着した家族計画

第5節　出生率の見通し

第3章　健康と長寿を求めて――死亡と平均寿命の動向――

第1節　世界最長寿国への歩み

第2節　死亡率はどのように低下したか

第3節　死亡率低下の背景――社会経済的要因と死亡率――

第4節　平均寿命はどこまで伸びるか

第4章　人の住み方はどう変わったか――人口分布と人口移動――

第1節　人口分布と都市化

第2節　人口移動はなぜ起こるか

第3節　将来どの地域にどれだけ人が住むか

第5章　高齢化社会を迎えるにあたって

付　録　世界人口の動向と問題

第1節　世界人口の動向

第2節　出生率と死亡率の変化

第3節　年齢構造の変化とその影響

第4節　人口の都市化

第5節　国際人口移動の変化

第6節　人口政策の現状

（以上のようになっており，これに参考となる関連統計資料が付されている）

なお，この報告書は『日本の人口・日本の社会――高齢化社会の未来図』と題して公刊（東洋経済新報社，本年8月初）される予定である．

第36回日本人口学会大会

日本人口学会の第36回大会は，昭和59年6月1日(金)，2日(土)の両日にわたり，中央大学多摩校舎（東京都八王子市東中野）において開催された．今回の大会は，中央大学経済学部の岡田實教授を委員長とする大会運営委員会の多大のご尽力によって盛大に行なわれ，終始熱心な雰囲気のうちに充実した大会日程を終了した．

会員参加者は100名をこえ，本研究所からも多数の関係者が出席した．

大会プログラムは下掲のごとくであるが，本年は学会役員の改選期にあたり，大会直前に行なわれた選挙によって新役員（理事・監事）が選出され，新理事会の互選により小林和正氏が新会長に推薦され，会員総会において承認された．なお，かねて辞意を表明されていた篠崎信男前会長および三原信一元監事は，永年同学会に尽くされた功績をたたえられ，理事会において名誉会員に推薦され，総会において承認された．

新任された役員（任期2年）を示すと次のとおりである（常務理事は会長指名）．

会　長	小林和正（日本大学人口研究所教授）
常務理事	畑井義隆（明治学院大学経済学部教授）
〃	村松　稔（国立公衆衛生院衛生人口学部長）
〃	濱　英彦（成城大学経済学部教授）
〃	吉田忠雄（明治大学政治経済学部教授）
〃	山口喜一（人口問題研究所人口情報部長）
理　事	岡崎陽一（人口問題研究所長）
〃	江崎廣次（福岡大学医学部教授）
〃	安川正彬（慶応義塾大学経済学部教授）
〃	河野稠果（人口問題研究所人口政策部長）
〃	石　南國（城西大学経済学部教授）
〃	大淵　寛（中央大学経済学部教授）
監　事	岡田　實（中央大学経済学部教授）
〃	河邊　宏（人口問題研究所人口移動部長）

研究報告会において行なわれた報告の題名および報告者を掲げると次のとおりである．

第1日（6月1日）

○自由論題報告

1. 「結婚難」に関する一考察……安蔵　伸治（南カリフォルニア大）
2. 避妊と出生間隔―3つの都市地域の事例―……渡邊　吉利（厚生省人口研）
3. 家族行列の理論と応用……廣嶋　清志（厚生省人口研）
4. 発展途上国の人口分析におけるアルファ・インデックスの現代的意義……丸山　博（元大阪大）
   藤岡　光夫（関西大）
5. ベイズ型コウホート・モデルについて……中村　隆（文部省統数研）
6. 昭和55年におけるパリティ別人口の推計について……松村　迪雄（労働省統計情報部）
7. 出生性比の構造分析……石　南國（城西大）
8. 出生及び死産の曜日による変動について……江崎　廣次（福岡大）
   渡辺　大介（〃）
   百瀬　義人（〃）
9. 労働力参加行動の動態的分析……今井　英彦（中央大）
10. 年齢構成変化が与える労働市場への影響……小川　直宏（日本大）
11. 労働供給行動の地域的分析……水野　朝夫（中央大）
12. 低開発国の人口と食糧の長期分析……畑井　義隆（明治学院大）
13. 特定被害に影響された死亡率についての一考察……前田　行雄（医薬被害救済基金）
14. わが国の死亡率低下に医療技術がはたした役割について……西田　茂樹（公衆衛生院）
    村松　稔（〃）
15. わが国における零歳平均余命延長の特異性について……正木　基文（東京大）

16. 世代生命表と普通生命表の考え方を組み合わせた利用法の一法……飯洲 康雄（琉球大）
笠置 恵子（〃）
加藤 種一（〃）

17. 1975年配偶関係別生命表……山本 文夫（中村学園大）

○共通論題A「人口研究におけるシミュレーション・モデルの役割」報告
<組織者> 阿藤 誠（厚生省人口研）
<座長> 村松 稔（公衆衛生院）

A—1. 出生力の生物人口学的モデル……河野 稠果（厚生省人口研）
廣嶋 清志（〃）
渡邊 吉利（〃）
高橋 重郷（〃）
金子 隆一（〃）
<討論> 大塚柳太郎（東京大）

A—2. ロジャーズ・モデルの意義とその日本人口への応用例……南條 善治（福島県立医大）
<討論> 河邊 宏（厚生省人口研）

A—3. 人口・経済モデル……山口三十四（神戸大）
<討論> 加藤 寿延（亜細亜大）

○共通論題B「労働供給と人口構造」報告 <組織者> 水野 朝夫（中央大）
<座長> 石南 國（城西大）

B—1. 経済成長と既婚女子の労働供給行動
—研究動向と分析視角……樋口 美雄（慶応義塾大）
<討論> 小野 旭（一橋大）

B—2. 有配偶女子の就業行動—実態調査分析を中心に—……中野 英子（厚生省人口研）
<討論> 濱 英彦（成城大）

B—3. 高齢者の労働供給行動……兼清 弘之（亜細亜大）
<討論> 丸尾 直美（中央大）

第2日（6月2日）

○共通論題C「死亡率の分析的枠組」報告 <組織者> 小林 和正（日本大）
<座長> 小泉 明（東京大）

C—1. 死亡研究の新しい潮流……河野 稠果（厚生省人口研）
高橋 重郷（〃）
<討論> 高橋 真一（神戸大）

C—2. 死亡率および社会的文化的指標の年次別変動……山本 文夫（中村学園大）
<討論> 廣嶋 清志（厚生省人口研）

C—3. 環境抵抗とその緩和策—職業生活，医療・保健活動—……鈴木 継美（東京大）
<討論> 竹本泰一郎（長崎大）

○自由論題報告

18. 人口移動率変動の説明要因としての人口転換と家族制度……伊藤 達也（厚生省人口研）

19. 地域別都市人口比率の推移に関する一考察：
ロジスティック曲線の集計……鈴木 啓祐（亜細亜大）

20. 日本における高齢人口の移動……大友 篤（宇都宮大）

21. ロジャーズ・モデルによる福岡県を中心とした地域の人口解析……重松 峻夫（福岡大）
南條 善治（福島県立医大）

22. 都道府県別将来人口推計——試論—……安川 正彬（慶応義塾大）

23. マルサス『人口論』初版について
—マルサス理論との関連において—……柳田 芳伸（関西大）

24. 人口転換理論の一考察
—エントロピー・サイバネティックスとの関連—……麻生 武典（カリフォルニア州立大フラトン校）

25. 静止人口思想に関する一研究—経済学的見地から—……森岡 仁（駒沢大）

26. P.A.ヴィクターの大気汚染防除の動学的考え方……高木 尚文（帝京大）

27. 人口都市化と消費生活行動……黒田 俊夫（日本大）

○記念講話「マルサスと私」……名誉会員 南 亮三郎

○シンポジウム「マルサスと現代世界」 <座長> 岡崎 陽一（厚生省人口研）
森岡 仁（駒沢大）

1. 先進国におけるマルサス……岡田 實（中央大）
<討論> 皆川 勇一（千葉大）

2. 開発途上国におけるマルサス……大淵 寛（中央大）
<討論> 畑井 義隆（明治学院大）

3. 社会主義国におけるマルサス……吉田 忠雄（明治大）
<討論> 黒田 俊夫（日本大）

1984年度米国人口学会（PAA）

1984年5月3日から5日まで，米国のミネアポリス州都ミネアポリス市にて米国人口学会（Population Association of America）が開催され，本研究所から人口政策部長河野稠果が出席する機会を得た．

米国人口学会の活動状況については，河野が昭和55年度の『人口学研究』（日本人口学会機関誌）に，「アメリカ人口学の最近の動向」として紹介したことがあるが，その会員は約3,000名で，日本人口学会の会員に比べて約10倍の会員を擁し，その発表種目の多彩なことでは，この種のナショナルな人口学会としては世界で断然一位の実績を持つ学会である．すでに，その紹介で明らかにしたように，米国人口学会はその視座がグローバルであり，米国だけに通用することなく，世界全体に普遍的に通用する，世界の最尖端を行く研究業績の発表で世界をリードする学会である．とくに発展途上国の人口研究を手広く，詳細かつ精緻に行っていることで定評がある．

もう一つの秀れた特徴は，若い優秀な人口学者が，発表者としてあるいは討論者として参加していることであり，その意味では国際人口学会の発表者が比較的大成した，すでに一家を成した人口学者の発表・討論を中核にしているのと比べて，若い血の躍動する，そして独創性のある研究業績が多いことが特筆される．

今回のミネアポリス大会は部会が64もあり，人口増加，出生力，死亡，結婚，家族，人口推計，人口推定論，高齢化，人口モデル，出生力を決定する社会経済的要因等を広く網羅する範囲の広さ，きめの細さで出色の大会であったと言えよう．一番多い時では，同時に6部会も同時に進行しており，出席の選択に困る程の内容の豊富さ，発表者・討論者の人材の多彩さであった．

一つ大いに感じたことは，人口学の計量化・数量化が強くなっていることで，分析に例えば proportional hazard model, log-linear model, multi-state life table, シミュレーションが日常茶飯事として応用されていることであり，人口学の数学化の傾向を感じさせるのである．とくにコンピュータの利用が最近常に容易になったこと，データがより豊富に取られるようになったことが理由として挙げられよう．筆者はとくに，出生率の予測に関する方法論の研究，形式人口学の最前線，家族人口学，死亡分析の発展等に関する部会に出席したが，その数学化は背景的知識がないと充分ついて行けない位の，非常に複雑化した状況を示していた．

会長の Samuel Preston は会長演説の中で，高齢化恐るに足らずの議論を展開し，高齢者は選挙権を持つが，青少年人口は持たないこと，将来高齢者のニードを充たす高年齢産業がブームを起し，他の年齢グループからの資本移転をもたらすことを述べたが，我が国などでは見られぬ画期的現象だと理解され得る．

（河野稠果記）